

K to I

パン de 恵比寿

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

秀知院学園文化祭『奉心祭』に向けて準備に追われる生徒会役員たち。

そんななか四宮かぐやの近従、早坂愛はある意外な人物と立ち会っていた。

目次

3話	2話	1話
17	10	1

1話

カラリと溶けた氷が音を鳴らす。

香ばしい珈琲の香りと穏やかなBGMの流れる喫茶店内。テーブル席には制服姿のままの学生客などが集っては、思い思いに談笑に花を咲かせている。朗らかであれど騒がしすぎるわけでもない、素朴で長閑な、喫茶店が持つ特有の賑わい。

……だが、そんな空気とは一線を画すように窓際の一席……先ほど降り出した雨にしんしんと濡れ行く街並を一望できるその席だけは、張り詰めたような重い緊張感に包まれていた。

「……お、おい。誰か3番テーブルのグラス引きに行けよ」

「ムリっすよ、あんな今にも別れ話切り出しそうな空気に顔出せるわけないじゃないですか」

「何言ってるの、座ってるの女の子二人よ?」

「いや だから おつかないんでしょ!?!」

「てか二人とも目え怖っ!」

厨房から顔を覗かせてはヒソヒソと話す店員たちの視線の先、窓際の席で向かい合う二人の少女。二人が二人とも、街ですれ違えば誰もが振り返るほど美しい容姿、柔らかな微笑を湛えアイスコーヒーを口に運ぶ様は、それだけでも『絵』になるというのに、伝わってくる雰囲気はどこか冷たい。

「……コーヒー。おかわり頂きますか?」

「……お願いします」

笑顔とは裏腹にぎこちない会話。余所余所しい、というよりどこか相手の出方を探り合っているような。

再びカラリと鳴る氷の音。残り少なくなってしまったグラスを口に、少女はちらりと、向かいに座るもう一人の少女へと目を向ける。

照明に輝く金糸のように美しい髪。瞼に覗く澄んだ空色の瞳。一挙一動、ふとした所作からも感じ取れてしまう気品と優雅さ。

ああ。この人が、お兄いの……

「……それと。私の方が年下なんですから、敬語はいらないですよ。ハーサカさん」

『K t o I 』

30分程前

4車線の道路を隔て山脈のように連なる高層ビルの群々。東京随一とも評されるデパート街で一人、早坂愛は立ち尽くしていた。

浮かべる表情は不満の一言。手には大量の荷物を抱え、足元にまで持ちきれなかった紙袋をいくつにも並べている。

開催まで残り数ヶ月となった秀知院学園文化祭……『奉心祭』に向けて買い揃えた備品の数々。飾り付け用の小物や来賓者に配る土産菓子、その他細々とした器具雑貨など。一つ一つは小さなそれらも、買い終えた頃には両手に溢れるほどの量となっていた。

加えて、これらはあくまで「予備」。

本当ならば、今日から2日後の日曜日、主人『四宮かぐや』と、その想い人である『白銀御行』の二人が、買いに訪れる予定だったものである。

奉心祭ではクラスごとに出す催しに加え、生徒会が独自に行うイベントもある。毎年 校舎の何処かに設置する宝玉のオブジェクト作成など、多忙繁忙を極めるそれら企画は、白銀会長を船頭に着々と進められ、その一環として、物品の調達を行う「買い出し係」が求められた。

しかし、平日は皆それぞれのクラスでの準備もあり、休日返上で出向かねばならない買い出し。加えて荷物の量も予想されるため、誰もこんな面倒な役を引き受けたがりはしなかった。

……と云うのはあくまで表の話。

奉心祭実行委員という大義名分のもと、休日の街を二人きりで買い出しに行ける……そんな絶好の機会を、件の二人がみすみす逃す筈がない。

かくして行われた、もはや恒例ともいえる生徒会主催ゲーム。交錯する二人の思惑に、かの混沌の権化が加わったことで、どのような筆舌に尽くしがたい こんどなたたかい が繰り広げられたかは知る由もないが、二人の天才は見事、買い出し役を請け負ったのだった。

それが一週間前の出来事。以来、かぐや様はといえば、毎夜のごとく鏡前に立つては、デートに着ていく服を熟考し。その度唸ったり赤くなったりと情緒不安定ぶりに磨きがかかるものだから、付き合われる早坂としては、いい加減 勘弁して欲しいと辟易する思いだった。

しかし、哀しいかな。いかに才気あふれる二人であろうとも、天災までは操ることはできない。

秋時の天気が移ろいやすいこの季節。加えて太平洋上に発生した台風が何を思ったか、サイクロイド通りの軌道で都心に突っ込んできたものだから、休日の買い出しは文字通り雲行きが怪しくなってきた。

予報を見る限りでは、どの程度の嵐になるかはまだ分からない。軌道によっては暴風域外に逸れる可能性もある。が、それでも万が一に備えて動いておくのが、四宮家侍従たる早坂の勤め。買い出しが中止になった際を備え、必要なものを代わりに揃えに来たのだった。

もちろん、全ては内緒事。あれほど楽しみにされているかぐや様の手前、中止の可能性などを示唆して、機嫌を損なわれでもしたら しまったものではない。

二人が買う予定のものを秘密裏に調査し。抜群の演技力を駆使しては、周囲に一切の疑念を抱かせぬまま仮病による早退をもぎ取り。本来なら半日はかかるであろう買い出しまでも、3時間以内に済ませ

てしまった。

買い出しそのものは面倒と思いながらも、自身の仕事ぶりには満足している早坂。

では、何故こんなにも不満げなのか。

「本当にかぐや様は……っ」

囁くような声から滲み出る怒り。

買い出しを終え、デパートの前の大通りで迎える車を待っていた早坂。

そこへかかってきた一本の電話。

ローリー曰く、車のタイヤに穴が空けられており、迎えを出せないのだと。

……犯人は分かっている。というか一人しか考えられない。

文化祭というカプルのできやすいこの時期。大方、余計な虫がたからぬようにと、また白銀会長と相合傘で一緒に帰ろうとでも試みたのだろうか、送迎を拒否したいからって、いい加減 車一台を潰すのはホントにやめてほしい。おかげで本当に必要だった私が足を失い、こうして立ち往生をくらう羽目になっている。

完璧に仕事を終えて、いざ帰ろうとしていた早坂にしてみればこれ以上ない横槍。誰のたかを思って買い出しに来たかを考えれば、なお感じが悪い。

送迎の車が無理ならば、タクシーはどうかと乗り場を訪れてみたが、下り坂の天気の良いだろう、既に大勢の待ち客が列を成していた。自分と同じように大量の荷物を抱えた主婦、待ち順と腕時計とを忙しなく見交わすスーツ姿のサラリーマン、e t c …。車にありつけるまでは、まだまだ時間がかかりそうである。

「はあ……」

小さく、けれど重いため息を零す早坂。

自分はいつたい何をしているのだろうと、徒労に疲れた心が虚しさ

を呟く。

今ごろ学園の皆は、奉心祭という一年に一度というイベントに向け、気炎万丈と勇み励んでいることだろう。共に協力し。知恵を出し合い。時に馬鹿騒ぎなんかもして……。長いようで短い青春の時間を、懸命に楽しんでいる。

……こうして仕事に時間を浪費している私とは大違い。紙袋のなかに覗く、色鮮やかな布や紙材、装飾品の数々。せめてもと、コレらの品が奉心祭で役立つ姿を想像し、心を慰める。

私が買うときはただ淡々と。時間に追われるまま店を回るだけだったが、かぐや様と御行君の二人が訪れるときは、きつと違う。

一緒に選ぶなかで意見を出し合ったり。仮装品をつけた姿を互いに見せたり。

……あの二人が買い出しだけで満足するはずがない。一緒にランチをして、買い出しとは全く関係のない、何気なく目に留まった露店なんかにも足を運んで。

その様は、側から見れば間違うことなき『デート』――

(……帰ったら雨乞いの方法調べよ。)

密かに胸に誓う早坂。

他意はない。今日の労力を無為にしないため。コレらの物品を無駄にしないため、だ。決して従者を大事にしない主人への嫉しさからの仕返しなどでは……

「あー……もう」

パタパタと。まるで背信に罰を与えるかのごとく、とうとう降りだした雨に空を睨む早坂。

降り始めにしてはヤケに大きな雨粒。時間をおかず本降りになるのは明白だった。人を呪わば穴二つ、というが紙袋に穴が開いてしまうのは勘弁願いたい。既に満杯にまで入っている中身は、袋が破ければ途端に地面へと散乱してしまうだろう。

急いでデパートの中へと戻ろうとする早坂だったがその両手は既に荷物で塞がり、一度足元に置いてしまったま荷物を再び抱え直すのは、流石の彼女にも困難だった。それでも泣き言一つこぼさず、一人荷物と格闘していると――

「あの――手伝いしましょうか?」

不意に背中からかかった鈴のような声。

振り返る視界に映りこむ白銀の髪。心配そうに覗きこむ、何処か見慣れた青い瞳。

少女――白銀圭と出会ったのは、まさにそんな時であった。

「さつきはありがとう。運ぶの手伝ってもらって」

「いいえ……。そうすべきと思ったことを、したまでですから」

数分後。2人は一旦荷物をロッカーへと預け、最寄りの喫茶店へと訪れていた。益々と強くなつて来た雨足。四宮邸の運転手がタイヤの修理を終え迎えに来るまでの約一時間、雨宿りも兼ねて、圭をお茶へと誘ったのだ。

助けて貰ったお礼……。そして微かな打算も。

「それじゃあ、圭ちゃんも文化祭の買い出しに来たんだ」

「はい。でも今日は下見です。この辺りには、あまり買い物に来たことがなかったのだ」

そう言って取り出した近隣デパートの案内書^{パンフレット}。そこには今日まわって調べたであろう、営業時間や各所で購入するもの、移動スケジュールなどが綿密に書き込まれていた。

(やっぱり……。似ている)

コーヒートの苦味を舌に溶かしながら、向かいに座る少女を改めて見つめる。

よく見知った面影を残す少女は、やはり兄妹というべきか、放つ雰囲気もどこか似ていて……先ほど助けてくれた事もそう。ふとした仕草に感じる真面目さや誠実さは、初対面であるにも不思議と安心感を覚えるものだった。

工作上、疑いの目ばかりを人に向けてしまう早坂にとって、それがどれほど珍しいことかは、彼女自身が一番よく理解していた。

「……けれども」

「……………」

「……………」

先ほどから漂うこの空気。会話のパスも3回以上続いた試しがない。友人とその妹さんという、遠くもなければ近くもない微妙な間柄に、互いに緊張するのわかる。だが二人とも、別に人見知りというわけでもない。早坂ともなれば、初対面の相手に向ける顔、被るべき仮面などは幾つにも持ち合わせている筈。

しかし、ある疑問。ある危惧が、早坂に取るべき仮面を迷わせていた。

（……この子は、いったいどこまで知っているのだろうか。）

そう。問題は、彼女があのお銀会長の妹さんであるということ。

圭が『ハーサカ』という女性に抱く人物像……。

単なる兄の友人にすぎないのか。

フィリス女学院に通い、学業の傍らバイトでメイドをやっている一女学生としてなのか。

「……まさか、数々の仮面を使い分ける、四宮家専属の近従……なんてことまで、知られてはいまいか。」

ベラベラ

会長が他人の秘密を易々と喋るような軽薄な人間だとは思わない

……。だが相手は会長の実の妹。世界で最もお銀御行を知る者、といつても過言ではない人物。我が家という憩いの場、ふとした油断に秘密をポロリと話してしまうことも、無いとは言いきれない。

街で初めに話しかけて来た時、圭はすでに私が『ハーサカ』であることを知っていた。

先日、対象Fが四宮邸にお泊りに来た際、テレビ電話越しにチラリと圭の姿が見えた気がしたが、それは相手からも同じだったのだろう。妹から嫌われている。と言うのが御行本人の談であったが、電話越しに聞こえてきた御行と圭のやりとり、遠慮のないドタバタぶりを見る限りでは、聴くほど陰悪な仲、という訳でもないようだった。

私のことハーサカに興味深々という風だった圭。御行くんから、幾らか話を聞く機会もあっただろう。

……もしここで。

彼女が抱く人物像とは異なる『ハーサカ』を演じてしまったら……それで不審を抱かれるくらいならばまだいい。

既にソレが演技だと知っている……知られてしまっている彼女に、なお『ハーサカ』の姿を演じてみせたとしよう。

やたらハイテンションに。

清楚ビッチのごとくキャピキャピと。

……滑稽なこと。この上ないし、助けて貰った相手に失礼すぎる。

妹への不敬。下がりきった評価は、兄である御行にまで伝わりかねない。

(No……プライド的にそれはNo……！)

人知れず戦慄を胸に、瞳に力を込める早坂。

一見、優雅にコーヒートを口元に運びながらも、その目は常に圭の一挙一動を見逃さない。

早坂が持つ類い希なる人心掌握術は、卓越した観察眼にこそある。その人がどんな行動を取るか、どんな思考パターンに陥りやすいか。累積されたデータにより編み出された行動予測は、それ故に抜群の精度を誇り、相手の心理をもいとも容易く誘導できてしまう。……だが、知り合って間もない者。未だ情報が少ない者に対しては効果が薄

く……だからこそ「対象F」のような予想も予測も出来ない理外の存在は、まさに天敵となり得る。

圭については、白銀会長の身辺調査を行うなかで、ある程度の情報は得ているものの、中等部という物理的に離れた距離、またかぐや様との接触もまだ少ないことから、情報収集が満足に為されていなかった。

今は目の前に座る等身大の彼女こそが、何より有力なデータ源。

私のことはどう理解しているのか。

四宮の家についてはどこまで知っているのか。さりげない会話や仕草の中から情報を抜き出さなければならぬ。

確かに難しい……だが同時にチャンスでもある。

私生活についてはまだまだガードが硬く、ラップの件然り、不用意に手を出せば思いもよらぬ惨劇を浴びせられかねない白銀御行という男。もしここで妹さんとの関係を築けたならば、彼という人間をより深く知る、何よりの糸口となる。

将を射んと欲すればまず馬を射よ。打算とはつまりそういうこと。密かな決意を胸に、早坂はより一層目を尖らせるのだった。

……だが、それは向かいに座る圭もまた同じであった。

2話

だがそれは向かいに座る圭もまた同じであった。

(この人がお兄いの……)

どうやら兄は恋をしているらしい。

それがこの一年、圭が兄 御行の姿に感じることだった。

それまでは色恋沙汰にはとんと縁がなく、珍しくバレンタインにチョコレートを貰って帰ってきたかと思えば、中からは髪の毛やら正体不明の煙が立ち上がったりと、決して恋愛に良いイメージがなかった兄。

それが最近では勉強中でも携帯を開いては、ラインの画面を前にニヤニヤと気持ちの悪い笑みを浮かべる始末。かと思えば返事一つに悶絶したりと、それが単なる友達相手への反応でないことは明らかだった。

……そう、そのラインの相手。兄の変化と期を同じく彗星の如く現れた『ハーサカ』という女性。

いま目の前に座るこの人こそが、兄の想い人であることを、圭は半ば確信していた。

「圭ちゃんのクラスでは、文化祭で何をするの？」

「た……飲食店を」

「そっかあ。じゃあ食材の衛生管理とか大変だね」

「はい……」

素直にたこ焼き屋と言えば良いものを、何を見栄はっているか。けれど、緊張するのも無理はない。

長らく携帯で存在を確認していながら、ラインのアイコンだけでは姿が見えず、変なあだ名だとばかり思っていたその人は、しかし実際に会ってみれば超が付くほどの美人さんだったのだ。

外国の血を感じさせる整った顔立ち。漂う気品はどこぞの名家の

ご令嬢か、フィリス女学院に通うというだけでも、とんでもないお嬢様であると窺える。

そんな人と兄はどこで、いったいどうやって知り合ったのか。

馴れ初めは？そもそも今の2人の関係は？友達以上か、恋人未満か。まさか恋愛のABCにまで足を踏みこんではいまいか。

あの奥手な兄にそんな甲斐性や度胸があるとは思わない。だが同時に、こと一度覚悟を決めたことに関しては驚くほどの行動力を示せる人だということを、妹の圭はよく知っていた。

(2人ともまだ学生のうちにそんな……。いやでも『高校生までに3人に1人は初体験を済ませてる』って萌葉から聞いたことあるし……)

悶々と押し寄せる煩惱の波。湧き立つ興味はとどまることを知らず、安易に口を開けば、拍子にポロポロとこぼれ出てしまいそうである。

——だがそれは拙い。

現在反抗期真っ只中。家で顔を合わせれば二言目には文句が飛び出す邪険ぶりを演じる圭にとって、兄の情事につがつ興味を示す様を見せるのは、殊更に恥ずかしいことであった。そも兄の恋路にイタズラに顔を突っ込む妹など、ブラコンと捉えられかねない。

これで仮に、2人が既に恋仲であった際——

『そういえばこの前、街でばったり妹さんと会ってね』

『圭ちゃんど？』

『うん。私たちのこと、色々聞かれちゃったなあ。すごく真剣な様子で……。やっぱり妹さんとしては、色々気になるんだと思うよ。』

『いや……。けど家ではそんな』

『ふふ、そりゃあ、2人きりじゃ素直になれないよ。近すぎると逆に見えなくものつてあるじゃない？兄妹同士……。本当は、お兄ちゃんを取られて、寂しい気持ちもあるんじゃないかな』

『……。そう、か。まったく、もう兄離れしてもいい年ごろだろうに……。お可愛いやつめ』

(「ー」はああああ!!?)

自らの想像に青筋を浮かべ怒れる圭。

冗談ではない。そんな会話をされようものなら忿怒と羞恥で舌を噛み切りかねない。

やはり下策。兄の情事に興味深々と思われるなどプライドが許さない。

「ー」だがそれでも。胸奥に沸き起こる期待感を拭いきれないのも事実。

将来兄に恋人ができて。こんなにも綺麗な人が義姉になって。ウチのあの狭いキッチンルーム、2人肩を並べて楽しんで料理を嗜む……そんな淡い情景に、心躍る気持ちを抱かないわけではないのだ。(なんとかか……なんとか怪しまれず。それでいてさり気なく、お兄いとの関係を確かめる方法はないか)

彼女の方から兄の話題を振ってくれば幸いなのだが、今まで話をした印象、悪戯に自分達の関係をひけらかすような人にも見えない。

やはり自分で切り出すか、なんとか上手く話を誘導して「ー」

「ー」?

珈琲を口に運ぶと澄ました表情の下、そんな思案ばかり浮かべていると、ふと向かいに座るハーサカさんが手を上げているのに気づく。

「圭ちゃん、お腹すいてない?」

「へ……?」

「すみません、シナモンパイ2つお願いします」

圭の返事を待つまでもなく、寄ってきた店員に注文を伝えるハーサカ。

2つ。その数字が示す意味に即座に気づいた圭だったが、その口が開くよりも早く、店員はまるで逃げる様にいそいそと厨房へと引っ込んでしまった。

「このパイ、凄く美味しくてね。雑誌で何度も紹介されるくらい人気なんだよ」

「そんな……悪いです」

「ううん、ご馳走させて。さつき助けてもらったこと。それに、普段お兄さんのお世話になってることのお礼も含めて、ね?」

優しげに、それでいてどこか悪戯気に片目を瞑るハーサカに、口を噤んでしまう圭。

きつと弾まない会話に気を遣ってくれたのだと思う。せつかくの厚意を無下にするのも失礼だし、既に為されてしまった注文を取り消すのも気が引けた。

何より、彼女の口から兄の話題が出たことは、圭にとってまたとない僥倖であった。

「兄とは、その……長いんですか?」

「御行くん? そうだなあ。互いに知り合ってから、もう1年くらいになるかな。最初に出会ったのは、私のバイト先でね。……まあ出会ったって言っても、私の方はもつとずっと以前から、彼のことが知ってたんだけど」

「ふ、ふーん?」

どこか照れたようにはにかむハーサカに、微笑み返す圭。無論、背筋には冷や汗を浮かべながら。

それはいったいどういう意味なのだろうか。

一年以上前ともなれば、お兄いはまだ秀知院学園の生徒会長にも就任していない頃。学業的にも今ほどの優秀さはなく、フィリス女学院の生徒に名を馳せるほどの知名度もなかった筈。それでも他校の、ほんの一生徒に過ぎないお兄いを気にしていたということは、つまり

（というか『御行くん』……!?!）

なんてさり気ない名前呼び。学校では会長の名で通っている手前、父以外から兄の名を聞くこと自体、久しぶりな気がする。

「……フィリスの生徒さんでもアルバイトしてるんですね」

「まあ私はちよつと特別な。周りの友達でしてるとて子はあんまりいないし……でも御行くんや圭ちゃんだつて、秀知院生なのにバイトしてるじゃない？」

「い、いえ。うちはその……うちもちよつと特別で」

「ふふ。でも良い経験だつて思つてるよ。社会勉強にもなるし……こうして、圭ちゃんや御行くんとも知り合えたんだから」

そう嬉しそうに微笑むハーサカに、思わず頬が熱くなるのを感じる。

なんというか……初めに会つた時は、どこか近づきがたい、まさに高嶺の花のような印象を受ける人だったが、実際に話してみればとても気さくで、親しみやすい人だと思える。ふとした仕草に感じる気遣い。それは勿論、兄との繋がりがあるから優しくもしてくれているのだろうが……初め緊張を抱いたからこそ、雰囲気ギャップに不思議な安堵感を抱いてしまうのだ。

(お兄いも、こつういう所に惹かれたのかな)

テーブルに出されたシナモンパイ、その蕩けるような甘い香りに感銘しながら、妙に納得してしまう圭。

——無論、全ては早坂の策略てのひらの上である。

(やはり、私のことはフィリスの一女生徒と認識しているようですね) 警戒する相手の緊張を解きほぐすことなど、人心掌握のプロである早坂にとっては造作もないこと。浮かべる笑み、仕草、気遣いに至るまで、全ては圭を籠絡せんがための策略。

このまま警戒心を薄れさせ、少しずつ情報を聞き出していけば、彼女が「私」ハーサカに抱く人物像も浮き彫りになっていく。引いては、白銀會長の秘密を提供してくれる、有力な情報源となつてくれることだろう。

(……今のところ、ハーサカの演技に違和感を持たれている節もない。)

厳密には対白銀御行用であるハーサカの性格に、圭からの信頼も得るべく多少ブレンドを加えたもの。できる年上の女性としての余裕

と威厳をプラス。それでいて親しみやすいよう多少の茶目つ気をプラス。お兄さんの友人としての安心感をプラス……。

その効果は上々、次第に警戒を解きつつある圭の姿に、我ながら見事な采配だと心の中でゴチる早坂であったが、実はその対応、自らの主人と全く同じ轍を踏んでいることに気づいていない。

鼻をくすぐるシナモンの香り。サクサクとしたパイ生地の中に隠れるカスタードの甘みに顔を綻ばせながらも、2人の鏝迫り合いは続いた。

「でも学校も違うし、お互い忙しいからあんまり遊びに行ける機会がないんだよね。ラインではよくお話するんだけど」

「そ、そうなんですか」

「2人で一緒に行ったのも参考書選びの本屋だったり、あとはカラオケぐらいでー」

「ほ、ほーっつ?!」

「ぐらい? 「ぐらい」と言っただろうかこの人は。」

無論早坂が述べたのは、合コン妨害策として先日送り込まれたカラオケ屋での一件である。早坂と白銀御行の2名がたった2人きりで過ごした時間はその機会を置いて他に無く、早坂からしてみれば、言わば小のうちの太。数少ない特別な例を挙げたに過ぎない。

だが。兄とハーサカの関係を疑い、かつ2人が自分たちの関係をイタズラに誇示しようとしなれないと思いついている圭から見ればニユアンスが大きく異なってくる。

つまりは大のうちの小。「本当はもつと色んなところ行ったり 色んなことしちゃったりしてるけど、カラオケデート「ぐらい」なら言っちゃっても大丈夫だよな」と。

(というか、お兄いとのカラオケを「ぐらい」で済ませられる普通!?)

幼少の頃より共に過ごしてきた圭にとって、兄の歌唱力とは極めて警戒が必要なソレあり、先日家の中でラップの練習を始めた折には、純然たる殺意を思い抱いたほどである。

その厄災を、かくも寛容に言い流してしまうとは、いったいどれだけ兄と理解と信頼を深めているのか。

コホンコホンと。パイ生地が喉に引っかかったフリして咳払いを一つ二つ。動揺する心を抑え、必死に表情に出すまいと努める圭であつたが、早坂の眼まではごまかせない。

何か失言があつただろうか、と明らかに態度を変えた圭に、目を細める早坂。

初めに比べれば順調に心を開きつつあると感じるも、あと一步、やはり何処か余所余所しさが拭いきれない。

疑われているような、探りを入れられているような。そんな感覚が常に首裏をくすぐるのだ。

けれど、ハーサカの正体以外に疑いを向けられる理由なんて――

(……………まさか――)

「圭ちゃん、その……………ね。ちよつと聞きたいことがあるんだけど」

「……………？…なんでしょう」

「知ってたらでいいんだけどね。……………ううん。聞いてたらで……………」

今までになく歯切れの悪い様子のハーサカさん。気恥ずかしげに俯いた後、意を決したように顔を上げ――

「御行くんが私のこと、どう想ってるか知らない？」

3話

——御行くんが私のこと、どう想ってるか知らない？

時が止まったかのような錯覚。囁かれた言葉が頭の中でやけに大きく反響するなか、圭はグラスを口に運ぶ手を止め、向かいに座る少女を凝視していた。

「そ、そそ……それはどういう？」

「ああ、ごめんね。深い意味は無く……ただ御行くん、家では私のこと、どんな風に話してるかなって思ってた」

どこか照れたようにはにかみ……しかし薄く開いた瞼の奥で、絶えず圭の動向を窺い離さない早坂。

それは彼女が抱える様々な思惑が交錯した末の問いだった。

一つは無論、四宮侍従としての務め。

圭が『私』について抱く人物像……兄 白銀御行から、『私』のことをどのように伝え聞いているか。その確たる証言が得ることができれば、彼女相手に抱える不安要素も無くなり、取るべき仮面を迷うことも、今のようは無用な探りを入れる必要もなくなる。これから四宮侍従として行っていく『仕事』も、幾らか楽になることだろう。

そうした理由とは別に……早坂にとってはむしろ此方の方が重要と云えたのだが……妹さんの態度。その出会った当初からいつまでも解けない『私』への警戒心に、一抹の不安を覚えてしまったからだ。た。

そう……妹さんは、『私』に対して初めから不信感を抱いていたのではないか。こうして出会う以前から。

御行くんが家で話した『私』への評価は——決して、良いものばかりではなかったんじゃないかって……

白銀御行という人は、私と同じ、外面を取り繕うタイプの人間だ。責任と重圧が圧しかかる会長職の仕事に加え、勉学やバイトに忙殺

される日々……。そこには常に秀知院学園会長としての品格が求められ、重責は歴代受け継がれる金刺繍の装飾とともに、重く肩へとのしかかっている。

だからこそ、だろう。その重荷から僅かでも解放される場、我が家という憩いの空間においては、いかに己を律することに長けた彼であろうと、つい本音を吐露してまうこともあるのではないか。

私が普段、誰にも見えぬところで一人愚痴を零すのと同じように……。唯一心を開ける肉親、妹さんの前だけでは、人に明かせないような本音を晒すこともあるのではないか。

仕事への憤懣。友人関係の悩み。そしてそこには、『私』という人間に対する評価も……。いかに普段、友好的に接してくれている彼でも、面と向かつては言えないこと。胸の内になってしまう嫌悪感、なんてものも有ったかもしれない。

心の奥には積み重なった不信感、猜疑の数々が、こうして妹さんを介して顕れているのではないかと――。

(なにせ私は……)

分かっている。こんな疑念を抱くこと自体、会長に対する侮蔑であること。

それでも、一度胸に湧いた疑念は、容易く消えてはくれなくて……。やはり かぐや様の言う通り、自分は決して性格の良い人間ではないと思ひ知らされる。

侍従としての使命。

友人としての憂惧。

交錯する多くの想いが、早坂に先の問いを投げかけさせたのだった。

――だが、圭の動揺はそれどころではなかった。

(げ、言質を獲りに来た……！)

真つ直ぐにハーサカを見抱いたまま、かつてない戦慄に震える圭。

『――御行くんが私のこと、どう想ってるか知らない？』

それは当初、自分がハーサカに問おうとしていたことを逆質問された形であり、これまでの抽象的な受け答えとは訳が違う、明らかに、兄からハーサカへの好意を確かめるための問いであった。

なんとという大胆さ、なんとという直球ぶり。これまで恋愛話には消極的とばかり思っていたのに、まさかこれほど露骨な攻勢を見せてくるとは。「恋は盲目」という言葉の恐ろしさを知ったような。期待と不安が入り混じるような淡い笑顔で答えを待つハーサカさんは、なるほど いじらしいほどに可愛らしかった。

しかしここまでくれば、ハーサカさんからお兄いへの恋心はもはや確実。

仮に2人がまだ恋仲でなかったにしても、今この問いこそが、間接的な告白になり得る。

既に付き合っていたならば尚酷い。

家では私のことどう話してくれてるかな…と。

離れても変わらず私のこと想ってくれてるかな…と。

ご家族の方にも私のこと、ちゃんと紹介してくれてるかな…と。

もはや完全に惚気の域。なんとという甘い世界、漂うシナモンの香りと相まって完全に胸焼けレベルである。

……だが落ち着こう。

コレは非常にまずい状況ではないか。

なにせ圭は兄の気持ちについて確証を得ているわけではない。あくまで予想。想い人がいることは分かるが、その相手を完全に把握しきれてはいないのだ。

もし、この場で 兄がハーサカを好いていると……彼女の告白を代受けするような返事をしてみよう。それで二人が両想いならば何の問題も無し、圭は二人の愛を射止めたキューピッドとなることだろう。

だが兄の想いが違う相手に向いていたなら……。その暁には修羅場に陥ること間違い無し。

妹の一言を発端に、本人の全くあずかり知らぬところで巻き起こる三角関係。あの返事は嘘だったのか、二股かけていたのかと。ドロドロに拗れた関係は愛憎の悲劇を糧に、少女の手に冷たいナイフを握らせ――

(いやいやいやいや)

何故かりアルに想像できてしまう、包丁を手にとる黒髪赤目の少女の幻影を消し去りつつ、我に立ち返る圭。

だが「YES」と答えられないからといって、変に断つたり言葉を濁してもすれば、2人の関係に亀裂を生むことも确实。

兄の想いがハーサカさんに向いていれば、その時点でご破算^{アウト}。失恋の原因を作った私は、甚だ兄に嫌われることになるだろう。

「……………」

――正直、それは避けたい。

いかに普段いがみ合うような態度をとっていても、本気で兄に嫌われて嬉しいわけではないのだ。

今までの演技も忘れ、恥も外見もなく熟考する圭。答えを窮する姿に、不安そうな顔を浮かべるハーサカさんの姿も見えているが、「これ」だけは軽い気持ちで答えてはならないと思っただのだ。

――そうして5分か。10分か。長きに渡る熟考の末、覚悟を決めたように顔を上げる圭。

Yes or No .

Do or Die .

その重い唇から出した答えは

「いやー、ちょっと聞いてないですね」
ESCAPE
逃避。

それまでの葛藤などかなぐり捨て、明後日の方向に全力で顔を背けては、お茶を濁す圭。

別に嘘は言っていない。本当に知らないのだから、答えられないの

も仕方がないのだ。決して一人で答えるには重すぎる責任に日和つたわけではないのだ。

「お兄い、家ではあんまり外のこと話さないから」

「そう、ですか……」

「あ、いえ！でも嫌いに思ってるとか、そんなことはないです！ラインしてる時なんて、引く……本当に楽しそうにしてますから！」

やはりというべきか、何処か悲しげに、しゅんと息を落としてしまふハーサカさんに、慌ててフォローをいれる。彼女とて、きつと一大決心のもとにあの問いを投げかけたのだろう。このままではご破算コース確実と、なんとか軌道修正をしようと、言葉をまくしたてるのだった。

「正直、珍しいなって思ったんです。おに……兄はかなり見栄っ張り……会長の名で通っている体もあって、ラインで返信するときも、相手によっては相当緊張して文章考えたりするんです。それこそ、何分も携帯と睨み合うくらい……」

そういえば、一度四宮先輩に返すのを見かけた時は、20分くらい時間をかけていた。その時も引くくらいニヤニヤしていたが……まあかぐやさん相手なら仕方がない。

「けど、ハーサカさんが相手の時は、すごく自然体で……。あんまり肩肘張らないというか、遠慮がないというか……まるで中学校以来の友達相手みたいで……」

「……」

「え、えつと……」

自分でもあまりフォローになっていないことに気づき、しどろもどろと言葉を続ける圭。

……そんな様子がおかしかったのだろうか、向かいに座るハーサカはクスリと笑みをこぼすと

「ありがとう」

「え、はい。……はい？」

何に礼を言われたかもわからないまま、しかし、どこか安心したように微笑むハーサカさんの笑顔に釣られて頷き返す。

あんな答えでよかったのだろうか。疑問は胸に残るも、満足そうに再び優雅にコーヒーを嗜むハーサカさんの姿を見て、なんとか危機を越したとホッと胸を撫で下ろすのだった。

(少し……功を焦り過ぎましたね)

珈琲の苦味を舌に溶かしながら、静かに想いに耽る早坂。

膠着する状況に耐えかね、あわよくばと試みた問いであったが、思うほどの成果は得られなかったようだ。

やはり、こういうことは時間をかけて、ゆつくり情報を抜き出していくに限る。功を急いで迂闊に相手の胸中へ飛び込み、要らぬ不信を抱かれては元も子もない。

(今日のところは、関係を深めるまでに留めましょう)

なにも時間は今日一日に限られた話ではないのだ。このまま友好的な関係を築き、以後も会う約束を取り付ける……それだけの信頼を結ぶことができれば、次なる機会は如何様にも用意できる。なればこそ、今はより深く、圭との親睦を深める努力に徹するが得策――。

方針を固め、静かに息を吐く早坂。

自分のやり方^{セオリ}を曲げ、なお成果を得られなかったことに、不思議と悔しさは湧いてこない。胸を占めるのは、確かな安堵と満足感。

何故……？他ならぬ自身の感情に疑問を覚えながらも、次なる懐柔案を思案しつつ、早坂はまたグラスを傾けるのだった。

お兄いのことについては、先の一件で納得したのか、それからのハーサカさんは積極的に兄の話題を出すことはなくなった。

文化祭のことであったり、近くの人気のお店のことであったり他愛もない会話。と言っても話上手の彼女^{ハーサカさん}の話は、どれもとても興味深く……。先程までの緊張感が嘘かのようにゆったりと流れていく時間に、またいつ爆弾が投下されるやと身構えていた圭も、いつしか彼女の話に聞き入るようになっていた。

「今つけてるのも自分で作ったものなんだけどね。こうやって自作したネイルチップを付ければ、爪のお洒落だって簡単にできるし、値段もお手頃だから色んなアレンジが試せるよ」

「こんな綺麗なのが自分でできちゃうものなんですか？」

「うん。簡単に取り外しもできるから、ザコ……………風紀委員の人に
見つかりそうになっても、すぐ誤魔化せるしね」

「へえ……………(ザコ?)」

特にオシヤレの話題については、周りに詳しい人が居ないためにと
ても新鮮で。興味を見せるとハーサカさんは嬉々とした顔で教えて
くれた。

「入浴剤一つでそんなに変わるものなんですか？」

「全つつ然違う！入れると入れないとじゃ雲泥の差だし！疲れの取れ
方から肌の保湿、血行の促進、香りだけでも凄くリラックスできるん
だから！」

「そ、そうなんですか…」

「入浴剤を専門で扱ってるお店もあってね。ここのデパートだと3階
にあるんだけど、私もいつもここでー」

机の上に広げたデパートの案内図を指差しては熱弁するハーサカ
さん。余程拘りがあるのか、その勢いはなんとなく天体観測に向かう
兄と同じ雰囲気を感じた。

早坂としても、ついつい饒舌になってしまっていることは自覚して
いる。それでも、普段は話せる相手に恵まれない話題。加えて、なに
かと捻くれ者であるあの子とは違い、教えることに真っ直ぐに領き喜
んでくれる圭の存在は、新しい妹ができたかのように素直に嬉しかっ
たのだ。

「贈り物用の花をかうんだったら、ここのお店かな。種類も豊富だし、
包装もそれぞれの花にあった可愛いものを選んでくれてね。」

そこには、圭が会長の妹であるという安心感もあっただろう。四宮
の業務にとらわれるだけじゃない。彼と同じように、『私』個人とし

て、彼女と友情を築いていくことだつてできるかもしれない。そんな淡い期待に、浮かれそうになる心も感じていた。だから

「私も、『母の日』の贈り物はいつもここでー」

だから……そう。油断してしまったのだと思う。

しまった、と。気づいた時には遅かった。

弾んでいた心が急激に冷え落ちていくのを感じながら、恐る恐ると圭の表情を伺う早坂。

対する圭は、キョトンとしたように首を傾げていたが、早坂の意図することに気づいたのだろう。静かに息を零したのち、淡く微笑むのだった。

「ああ……それも、兄から聞いてたんですね」

あんまり人に話したがないのに凄いなあ、と。感慨深げに、そして何処か達観したように笑みを零す圭。それは早坂の目からしても……嬉しさとも悲しさとも分らない。儂く、胸に去来する様々の感情が入り混じったような表情に、早坂は胸に重いものが落ちるのを感じた。

それが実際に御行に聞いたわけではない。秘密裏の身辺調査で知り得たことだからこそ、彼女の勘違いが逆に悲しかった。

「いいんです。母が出て行ったのは、もうずっと昔のことだし……私たちの中では、とつくに折り合いが付いていることですから」

「寂しくは……ないんですか？」

言葉は知らずこぼれ出ていた。

何を知ったように、と思う。それでも、自身の中で「母」という存在が大多数を占める早坂にとっては、聞かずにはいられない……到底、分かり得ない感情だったのだ。

世界でたった一人しかない母。自分を愛し育ててくれた人が居なくなつて、それで平気だなんて……本当にそんなことがあり得るのだろうか。

「……正直に言うと、私はあんまり覚えてないんです、母のこと。まだ物心つくより前のことだったし、私にとっては、ずっとお兄いが母親がわりみたいなものだったのだから」

「そう、なんですか？」

「ええ。あ、でもべつに甘えきりなわけじゃありませんよ。家事はしっかり分担してますから。兄は料理担当。掃除や洗濯は私の担当です」

そこだけは譲れないばかりに、フンと息を吐いてみせる圭。

「……そうやって家事分担してるくせに、家では母親面して、小言ばかり言ってますけどね。食事中にジュースは飲むなどの。しっかりご馳走さまの手を合わせろだの……。そのくせ自分は、どんなに言っても靴下裏返しのまま洗濯に出すんですから」

実際に言われた時のことを思い出すように、顔をしかめては語気を強めていく圭。

そこには、先ほど見せた儂げな表情など微塵も残らない、快活な怒気の色が浮かんでいた。

「でもそのことを外で言ったら、絶対みんな否定してくるんです。立派な人だ。良いお兄さんじゃないかって。」

「……全つ然そんなことないっ！外ではいい格好しいだからみんな騙されてるんです。それも知らず白銀会長、白銀会長って……。ハーサカさんなら知ってるでしょう？お兄いのポンコツぶり」

「ええ、それはもう」

「そうですよ。絶対いつかボロ出しますよ、あの人」

カラオケでの一件を思い出し、苦笑まじりに笑う早坂に、初めて賛同してくれる人が得られて嬉しいのか、嬉々一杯、益々として溜め込んだ鬱憤を晒け出していく圭。だが愚痴ばかりだと言うのに、不思議と嫌悪感も伝わってこない。

これが兄妹というものなのか……そんな繋がりでの在り方を知らない早坂にとっては、とても奇妙で、とても羨ましい光景であった。

「だいたい会長なんて役職も、本当は柄じゃないですよ。それなの

に、周りに見栄張って、無理ばかりして……」

きつとこの兄妹は、自分などでは想像もできない苦労を共に乗り越えてきたのだろう。だからこそ築いてきた深い繋がりがあり、愚痴や喧嘩などでは揺るがない絆がある。

それこそ、母の不在など何の障害にもなり得ないほどに……

「……………」

そこまで考えて、脳裏に浮かんだ御行の横顔に、また胸に重いものが落ちる。

本当に、そうなのだろうか。

夫婦にとって、子は鎧なのだという。どんなに仲の悪い夫婦であろうとも、子供への愛情があれば、二人を繋ぎ止めてくれるのだと……。けれど鎧その役割も果たせず、千切り残された子はいったい何を思うのだろうか。最も多感な思春期という時期、母に見捨てられるという現実が、なんの感傷キズも残さないなんて……本当にそんなことがあるのだろうか。

努力中毒とも言える御行の性格。自分を才能ある人間だと、「出来る」人間だと思い込まなければ自我を保てず、そのために常人を遥かに凌ぐ努力を重ねる彼の日常。

……けれどもそれが、母に見放された過去に起因しているというのなら……。

母の代わりを努める理由に、かつて鎧の役目を果たせなかった自責があるというのなら……

「ハーサカさん？」

「っ、…………ああ、ごめんなさい」

知らず、暗い表情を浮かべていたことに気づき顔を上げる。心配そうな覗き込む圭の瞳。いつしか、彼女の口から兄への愚痴は止まっていた。

「……………」

早坂の気配を感じ取ったのか……あるいは彼女自身、なにか思うところがあつたのか、難しい顔で口を噤む圭。しばらく何かを考えるよ

うに口籠もるとー」

「ハーサカさんは、今のお兄いのこと、どう思いますか?」

「え……?」

それは、先ほど自分が投げかけたのと同じ質問。言い淀むように、瞳の奥に迷いのようなものを湛えたまま圭は静かに続けた。

「ああ。これも、別に変な意味ではないんです。恋愛面そっちの答えは、もうわかりましたから……ただハーサカさんには、今のお兄いがどんな風に見えているのかなって」

思い馳せるような瞳が窓の向こう、雨がりに沈んだ街に浮かぶ車のテールライトを追う。

「お兄いは……この一年で随分変わりました。」

秀知院に入学した頃は、子息令嬢の子ばかりが通う学校の空気に馴染めず、鬱屈とした毎日を過ごしていたけれど……一年前、突然勉強に熱を入れ出したことと思えば、途方も無い時間を勉強に費やして、成績を上げていつては、学年一位にまで登りつめた。その学力を武器に、今度は選挙戦に立候補して……私達混院では到底無理といわれた、生徒会会長に就任しました。

「ただどそれは、私から見れば……周りに嘘をついた……とても無理をした姿です」

両手で包むグラスの中、揺蕩うコーヒートの水面にじつと目を落とす圭。青い瞳には、その色を映し出すように、深い戸惑いの色が浮かんでいた。

「正直、私には今のお兄いが何を考えているか分からないんです。どうして……そこまで頑張ろうとするのか。」

初め生徒会長になった時は、『推薦状』目当てなのだろうと思いましたが。お兄い、星の研究するのが夢だったから……」

『秀知院理事會推薦状』

それは生徒会長の役職を一年間満了した者にのみ学園から送られる、世界中の有名大学や研究機関へのプレミアムチケット。もう1ステップ上の夢に進むための架け橋でもある。地位や資産といった後

る盾を持たない白銀にとつては、これ以上とない褒賞だっただろう。「……けど、それなら1年間務めればいいだけなんです。2年目まで続ける必要なんてどこにもない……。バイトや勉強で、只でさえ睡眠時間を削ってるのに、どうしてあんな激務を進んで引き受けようとするのか……」

「それは……」

思わず口籠る早坂。彼女は知っていたから。彼がいったい何のため、会長の職を続けようと願ったのか。

けれど圭にはそれが分からない。見えるのは、まるで今の地位に固執し、縫るように見栄を張り通す兄の姿。

「試験日が近づけば毎度のように徹夜して。自分で気にしてるくせに、目つきも悪くなる一方で……。若いうちの今は良いです、まだ無茶が出来るから……。けれどこの先、こんな生活を続けていたら、いつ身体を壊してもおかしくない。」

お兄いを突き動かしているものが何なのか……。どうしてそこまで頑張るのか。ハーサカさんならその理由を知ってるかと思っただけです」

真っ直ぐに。お願い願うような圭の瞳に、早坂は息を零す。

(ああ、やっぱり……)

この子も、そうなのだ。

かつて母を失い、残されることの哀しき、淋しきを知っているからこそ……。

大切な人が傍から居なくなってしまう恐怖、いつか遠くへ行ってしまうような兄の背中に、知らず怯えを抱いている。

幼少の頃より共に育ち。兄が頑張る姿を誰より近くで見てきたからこそ、それを誇りにしたい想い。

けれど本当は、そんなものに頼らずとも、兄がどんなに優しい人であるかを知っているから……。『会長』でも、『母親役』としてでもない。ただ、ありのままの自分を、大切にして欲しかった。

認めたい心と否定したい心。相反する二つの想いを抱え持つから

こそ、次第に遠くなつていく兄の背中に、ずっと迷いを抱き続けて来たのだ。

(……ようやく、わかった気がする)

彼女が、いったいどういう子なのか。

なぜ私が、この兄妹の間に入り……二人のことを、もっと知りたいと願ったのか。

「……大丈夫ですよ」

カラン、と。溶けた氷が音を鳴らす。

え……?と。顔を上げた圭の瞳に映ったのは、グラスを机に置き、宥め慰めるような優しい微笑みを浮かべるハーサカの姿だった。

「確かにあの人は見栄っ張りな上に意地っ張りで、自分の身を削ることを厭わない人だけれど。そこに溺れるような人でもなければ……圭さん、本当に悲しんでいる貴方を前にして、それを無視できるほど賤しい人でもない」

そうでしょう?と問う瞳には、信頼よりもっと強い色が浮かんでいた。彼女は言う。圭は、ただ そのままでいいのだと。

「周りがどんなに持て囃そうと、本人がどんなに無理をし、見栄を張り続けようと……貴方だけは変わらず、ずっと側で叱り続けてあげれば、あの人が自分を見失うことはない。『本当の自分』を見てくれる人。知ってくれる人が居ることは……それだけで、とても大きな救いになるのですから」

まるで自分のことを思い出すように、深く、穏やかに続けるハーサカさん。

……何故だろうか。今までずっと話してきた仲だというのに、彼女とはまるで今初めて出会ったかのような錯覚を覚えた。そう……初めて、出会えたかのような。

「……でも……」

「大丈夫。辛くあたってる今でさえ、あの人の口から貴方の悪口を聞

いたことは一度もありません。大切に想う気持ちは同じ。其れが出来るのも、世界でただ一人、貴方だけなのですから」

「……ロー」

唇をギュツと噛んで、顔を落とす圭。

彼女の囁く言葉の一つ一つが、まるで降り落ちる雫のように、心に波紋を立てていく。

認められたかのような嬉しき。胸の奥にずっと抱えていた重く暗い影が、すつと溶けていくような気持ちに、知らず目の奥が熱くなるのを感じた。

「……でも本音を言うのなら、あんまり叱らないであげて欲しいかな」
「ええっ!？」

それまでとは打って変わり、まるで逆のことをのたまう彼女に驚き顔を上げる。待っていたのは、クスクスと笑うとても楽しそうな表情。

「確かに御行く人一倍見栄っ張りではあるけれど……それは、あの人が描く理想の自分像。いつか成りたい自分を目指す姿でもある。……だから、全てを頭ごなしに否定するのは、やめてあげて欲しいな」
『ファツキン 俺の演技は理想のスペック いつか本物になるためのステップ』

いつか聞いたラップを思い出しながら、口元を綻ばせる早坂。

初めて逢った時は、きつと貴方も長くは保たないと思った。

自分を大きく見せようと、上手く見せようと演じるほどに、その差は重荷となって圧しかかり、元ある本当の自分の姿さえ歪めていつてしまう。かつて、かぐや様に言い寄ってきた数多くの男たちと同じ、己で築いた城の瓦礫に押し潰されて行くのだろうか。

けれどロー

『白銀……もう生徒会やるつもりはないって言ってなかったか?』

『そのつもりでした。だけど……一生に一度、根性見せる時が来てしまったみたいで』

貴方が何のために。誰のために想い、会長の職を続けようとした

のか。優しくなりたいと願うことは誰に出来ても、そう在り続けることの難しさを、知っていたから。

(そう…ようやくわかった気がする)

なぜ私が、圭をお茶に誘おうと思ったのか。

四宮の遣いとバレるかもしれないリスクを負っていながら…強引にも御行の気持ちを確かめようとしたのか。

『私達 普通に仲良くなれませんか?』

きっと私も不安だったのだと思う。

なにせ私は…「ハーサカ」として。幾度となく彼を騙して来た人間だ。偽名を使って側に近づき、誑かし。かぐや様への恋心を弄んでは、時に失恋られたことへの罪悪感を煽り、良心につけ込んだりもした。

そんな始まり方だったから…

ーうん。そんな始まり方だったけれど

『イエス、マイメン』

「その優しさは、演技なんかでは隠せない。

平凡で、些細で、本当に何気ないものだけけれど」

どこか私と似た貴方だから

初めて出来た、男友達だから

「そんなあの人だからー救われている人もいるんですよ」

囁き、微笑む彼女に息を飲む。

おだやかで、麗らかで、慈愛の色さえ湛える彼女の表情は、圭がこれまでに見てきたどんな笑顔より、綺麗なものであった。

ああ、この女性ひとだったら、きっとー

「本当に、送って行かなくていいの?」

「はい。もうすぐバスも来ますし……お兄いを差し置いて、私が先に家に連れていくななんて出来ませんから」

「?」
降り続けていた雨も止み、濡れたアスファルトに街頭の光が淡く瞬く頃。迎えにきた四宮家の車を前に、二人は別れの挨拶を交わしていた。

車の後部座席に座るハーサカは、サイドガラスを開け、見送る圭にまたお礼を言う。

「今日はありがとう。助けて貰った上に、色々お話もできて嬉しかった」

「私こそ。美味しいパイまでご馳走になって……アイ姉えの話も聞けて、本当に楽しかったです」

アイ姉えと。あの後圭に懇願され、ハー姉えやスミ姉えでは語呂が悪いと、二人だけの時に限り許したその呼び方に、妙なくすぐったさを感じながらも、笑顔で答える早坂。

「ふふ……初めは緊張したけれど、友達の妹さんと話せるのが、こんなに楽しいとは思わなかったな」

「そうですね。私も……」

出会ったばかりの頃を思い出し、笑いながら答えようとすると圭だったが、途中、表情がピタリと固まる。今何かおかしなフレーズを聞いたような

「え……友、達?」

「はい。大切な、友達です」

迷いもなく、とても綺麗な笑顔で返すアイ姉えに思考が止まる。いつかお休みの日に会いましょう、そう彼女がそう告げると同時、車の

エンジンがかかりゆつくりと動き出していく。サイドウインドウを開け、窓から顔を出したアイ姉えは、その姿が見えなくなるまで、ずっと笑顔で手を振り続けていた。

……後に一人、繁華街に残された圭。

帰り路に急ぐ人々の合間、オレンジに輝く街灯を呆然と見上げ一人
呟く。

「お兄い……片想いじゃん……」

数日後

「あれ。珍しいですね会長、そんなしつかりワックスつけてくるなんて」

「いやな、なんか最近圭ちゃんがオシヤレしろって凄くうるさいんだよ。そんなんじや絶対振り向いてもらえないぞとか……」

「なんでしようね……。まあバツチリ決まっていますけど」

「お、そうか。……ところで、四宮どこにいったか知らないか？急ぎで話し合わなきゃならん議題があるんだが」

「先輩でしたら、同じクラスの女子と一緒に、屋上に上がって行ってきましたよ。えっと……名前なんていったかな……」

「それで早坂……釈明は？」

「いきなり呼び出してなんのことですか、かぐや様」

寒風の吹きすさぶ校舎屋上。しかしそれにまさる怒気を湛え、かぐやはヒクつく笑顔で早坂へと詰め寄る。

「会長が最近になって突然オシヤレするようになったことです。」

「……それが私に関係しているの？」

「違うというの?」

「白銀会長だって年頃の男の子なんですから、身嗜みに気を使うのは当然でしょう。文化祭では外賓の方も招くのですから、今から外見に気を使うようになってもお不思議なことではありません」

「……。じゃあ最近、会長から あなたがよく好んで使う入浴剤と同じ香りがするのはどうして?」

「入浴剤の香りだって、種類は限られています。偶々似たもの手に取ることだってありますよ」

「そう……。あくまで シラを切るというのね……」

なら……。と更に睨みをきかせ、懐から携帯を取り出すかぐや。

それも、かぐやの私物とは違う。早坂がプライベート用に使っているうちの一つだ。私室に厳重に保管していたと言うのに、勝手に盗み出してきたのか。

「最近あなたのラインに加わった……。この『K』って子。随分と仲が良いうだけけど、いったいどこの誰なのかしらね?」

「それは最近できた新しい友達で……」

「ふうん? アイ姉えアイ姉えって凄く慕われているのねえ。貴方にそんな友達居たかしら?」

「……。それは……」

「それとこの文章と顔文字の使い方。というかラインのIDやアイコンに至るまで、全部私の記憶にある『あの子』と合致するのだけれど、それも全て偶然?」

「……」

「こんなに一杯ライン通知……。私だってまだこんなにお話ししたことないのに……。っ! 釈明は早坂あ!」

「最近圭ちゃん機嫌いいよねー。何かあった?」

「んー、そう?……。凄く綺麗で、頼りになるお姉ちゃんができたからかな」

「ええっ!? 誰それ、萌葉の知ってる人!」

「ふふー、秘密ー♪」

本日の勝利者 白銀 圭

「将来のお義姉さん候補獲得」